６新花摘（与謝蕪村）

　島のは、とをならべて尊きなり。余その寺に客たりける時、長老①古き板の余ばかりなるを、余に与へてく、「仙台の大守中将何がし殿は、②さうなき歌よみにておはせし。多くの人夫してのをさぐらせ、とかくして埋もれ木を掘り求めて料紙・の箱にものし、それにのの軸つけたる筆を添へて、③二条家へまゐらせられたり。これはその板の余りにておぼろげならａぬものなり。」とてびｂぬ。の木目のごとくあざやかなり。水底にをふりたるものなれば、色黒くがねを延べたるやうに、たたけばくわんくわんと音す。重さ斤ばかりもあらん、それをひらづつみして、肩にひしと負ひつも、からうじの駅まで持ちでたり。の疲れ耐ふべくもあらねば、その夜宿りたるのすのこの下に押しやりてまうでｃぬ。

鉄

たしかなものです

あれやこれや

人夫を使って

住職

私が

大きな禅寺

　そのほどへてがもとにに語りければ、潭北はらあしく余をののしりて曰く、「やよ、さばかりの奇物、うち捨て置きたるむくつけ法師よ、その物われ得てん。人やある、ただけ。」とがもとに告げやりたり。晋流④ふみを添へて、その人に教へて白石の旅舎を尋ね、いついつ法師の宿りたるが、しかじかの物忘れ置けり。それ求めにまかでｄぬ、と言はせければ、のあるじ、⑤かしこくさがし得て与へければ、得てかへりｅぬ。後、雁宕つたへて、といへる硯の蓋にして持てり。結城より白石までは十里余りありて、ことに日数もへだたりぬるに、得てかへりたる、⑥のことなり。

欲しいものだ

わけのわからぬ法師

はらだたしげに

やい

＊語注

＊松島…宮城県の松島湾内にある大小二六〇あまりの諸島。日本三景の一つ。

＊尺余ばかり…一尺あまり。「一尺」は約三〇・三センチメートル。

＊名取川…仙台市・名取市を流れ、太平洋に注ぐ川。

＊宮城野…仙台市が丘あたりの野。萩・鈴虫の名所で、古来歌枕として知られる。

＊十斤…約六キログラム。

＊白石…宮城県南部の市。

＊結城…茨城県西部に位置する市。

＊雁宕・潭北・晋流…ともに、江戸時代中期の俳人。

＊須賀川…福島県中部の市。

＊七十里…約二七五キロメートル。

問１　＝　線部ａ〜ｅのうち、文法的意味が異なるものが一つある。記号で答えよ。

（　　　）

問２　――線部①について、

　　⑴「の」に留意して現代語訳せよ。

〔　　　　　　　　　　　　　　　　 　　　　　〕

　　⑵「古き板」の様子が描かれている連続した二文を文中から抜き出し、

最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問３　――線部②･③を現代語訳せよ。

②＝〔　　　　　　　　　　　 　　　　　　　　　　〕

③＝〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 　　〕

問４　筆者が骨董品に執着していないことがわかる一文を文中から抜き出し、最初の五字を答えよ。

〔　　 　　　　〕

問５　――線部④〜⑥のここでの意味として最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号を○で囲め。

④　ア　文章　　イ　手紙

　　ウ　書物　　エ　漢詩

⑤　ア　優秀に　　　　　イ　こざかしくも

　　ウ　おそれ多くも　　エ　しっかり

⑥　ア　めったにないこと　　イ　絶対にないこと

　　ウ　賞賛すべきこと　　　エ　思いがけないこと

問６　「古き板」は、誰の手から誰の手に移っていったか。文中から抜き出して答えよ。（「使い」は除く。）

長老→〔　　　　　〕→〔　　　　　〕→〔　　　　　〕

【解答】

問１　ａ

問２　⑴古い板で一尺あまり（の長さ）であるもの（板）

　　　⑵槻の木目の

問３　②＝比類ない歌詠みでいらっしゃった

　　　③＝二条家へ献上なさった

問４　長途の疲れ

問５　④イ　⑤エ　⑥ア

問６　〔長老→〕余 → 潭北 → 雁宕

現代語訳　松島の天麟院は、瑞巌寺と甍をならべて尊い大きな禅寺である。私がその寺に客となっていた時、住職が古い板で一尺あまりの長さであるものを、私に与えて言うには、「仙台の大守中将某殿は、比類ない歌詠みでいらっしゃった。多くの人夫を使って、名取川の水底を探させ、あれやこれやして埋もれ木を掘り求めて（それで）料紙や硯の箱を作り、それに宮城野の萩で作った軸をつけた筆を添えて、二条家へ献上なさった。これはその板の余りでたしかなものです。」と言ってくださった。ケヤキの（木の）木目のような美しさである。水底で千年も経たものであるので、色も黒く鉄を延ばしたようで、叩くとかんかんと音がする。重さは十斤ほどもあるだろうか、それを平包みにして、肩にしっかりと背負って、ようやく白石の駅まで持ち出した。長旅の疲れに耐えられないので、その夜泊まった宿屋のすのこの下に押し込んできた。

そののち時が経って、結城の雁宕のもとで潭北に話したところ、潭北ははらだたしげに私を罵って言うには、「やい、それほどの珍しい物を、打ち捨て置いたわけのわからぬ法師よ、それは私が欲しいものだ。だれかいないか、すぐに行ってみよ。」と、須賀川の晋流のもとに使いをやって知らせた。晋流が手紙を添えて、その人に教えて白石の宿を尋ね（させ）、いついつ法師が泊まったが、これこれの物を忘れ置いた。それを求めに参った、と言わせると、宿の主人は、しっかり探して与えたので、手に入れて帰った。その後、雁宕が譲り受けて、魚鶴という硯の蓋にして持っている。結城から白石までは七十里余りあって、その上日数もたってしまったのに、取り戻して帰ってきたというのは、めったにないことである。

ポイント

問１　ａ「ぬ」＝「打消」。残りはすべて「完了」。

問２　「古き板の尺余ばかりなる」の「の」は、同格の助詞。「〜で」と訳し、連体形「なる」の後に体言を補う。

問３　②「さうなき」は「双なき」。「比べるものがない」の意。